

ニュースから探る

未来の兆し

聖心学園で行われた
未来研究プログラム

7/24	未来の兆しを集める ニュースをもとに 情報を収集する
7/31	未来の兆しを編集する 集めたニュースを 1枚ずつシートに書く
8/1	アイデアを生み出す シートを組みあわせて アイデアを考える
8/2	ストーリーを考える グループで相談し プロットをまとめる
8/3	ストーリーをつくる パソコンソフトで 動画を作成
8/26	プレゼンテーション グループごとに発表

学校では、大手予備校「河合塾」と連携し「未来の兆し」というカリキュラムに挑戦。新聞などのニュースから、未来の兆しを見つけ、それをもとに新たなアイデアを生み出すというプログラムを行った。

新たな学習指導要領の改訂で掲げられた「主体的で対話的な深い学び」に連なるアクティブ・ラーニングの手法を授業に取り入れようと、学校現場では試行錯誤が続いている。奈良県橿原市の聖心学園中等教育

アイデア生む「アクティブ・ラーニング」

情報積み重ね想像

今回のカリキュラムは同校の「探究」の授業の1環。7月24日にスタートし、夏休みを挟んだ8月26日までの計6日間にわたって開催し、高校1年にあたる中等4年の2クラス43人が参加した。

まずは、新聞やウェブニュースの記事を使って「未来の兆し」を集めるところからスタート。自分で選んだニュースをもとに、「高齢化社会が進みそうだ」「5Gで生まれる新たな生活」といったことを専用のシートに書き込んでいく。

生徒たちは、3〜4人ぐ

らのグループごとに、書き込んだシートを組みあわせて討論。「マイクロチップで健康管理」する医療の仕組みを想定したり、3Dプリンターで自宅にいながら洋服を作りだすことができる「ワンタッチ・コーディネート」といったアイデアに結びつけた。

単なるアイデアコンテンツではなく、ニュースとして裏付けられた情報を積み重ね、未来のあり方を想像するのがポイント。個人の「将来」ではなく、社会の「未来」を事実に基づいて考えるという特徴があるという。

生徒たちは授業のなか、プログラムの最終日、生徒たちは「SNSでシェアを元気に」「あなたがスコア化される未来」「VR(仮想現実)でひと味違うショッピングを」などのアイデアを発表。グループごとにイラストを使って作成した寸劇動画を披露し、それぞれのアイデアを説明した。

考える力・交渉能力養う



アクティブ・ラーニングが重視されている。講義形式で受動的に学ぶ形式とは異なり、正解がない問題などを取り上げ、グループワークやディスカッションなどを行い、積極的に深い学びを促す。



①発表の段取りを話し合う生徒たち
②プレゼンテーションソフト「パワーポイント」を使いプレゼンの準備を進める生徒たち—奈良県橿原市の聖心学園中等教育学校 (前川純一郎撮影)

産経ニュースに動画

「未来の兆し」は河合塾が考案した未来研究プログラム。アクティブ・ラーニングのカリキュラムとして導入する中学・高校が増えているといい、プログラムの担当者の山本尚毅さんは、「もし『未来』という科目があればこんな内容ではないか、という思いでつくった。身近なニュースのなかにも、未来の兆しがあるということに気づいてもらえると思う。それが探究の種にもなっていくのではないか」と話していた。